

長王詞苑：奈良文学より平安文学へ(二)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 奈良時代, 長屋王, 『懷風藻』, 『万葉集』 キーワード (En): 作成者: 小島, 憲之 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180221-100

長王詞苑

——奈良文学より平安文学へ—— (二)

(はしがき)

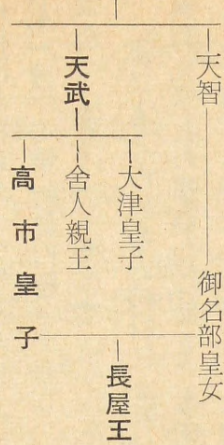
小島憲之

本稿は何回かにわたって発表させていただかうとする「奈良文学より平安文学へ——異国文学との関聯に於て——」(第八巻第一号)の第一部の続きであり、まだ第二部(弘仁期の文学)には入ってゐない。前稿では少しさきばしった点もあり、本稿では更にひき戻していろいろと考へてもみたい。いはば前稿に対しては「うしろむき」の稿でもある。前稿の一部は、幸にもその道の人の目にふれ、一二の反論もでたことは誠にありがたい。それについての私見は別の機会をまづ。「異国文学との関聯」に於て、奈良平安文学を考察しようとする場合、稿者にはあまりにも異国文学に対する理解力のないことを感ずる。これはひろく云つて国文学界にも云へることもあらうか。かうした「薄暗い谷間」はやはり中国学者の協力をも仰がねばならない。ひとへに御叱正を乞ふ(六月七日)

一 持統・文武朝を中心として活躍した柿本人麻呂の歿後、都はやがて藤原より奈良へ遷る(716)。以後天平初年まで約二十年間、山部赤人や高橋蟲麻呂の活躍期に入る。またその終り頃より大伴旅人、山上憶良相ついで西下し、筑紫の果てに筑紫歌壇とも称すべき「歌の座」を設ける。

赤人は彼の性格からか、小自然をよんだものが多く、人麻呂の如くあらはな「叫びごゑ」は少ない。民謡を利用し、それを掌の中に収めた人麻呂の手法は、赤人の歌には生きてこない。帝徳讃歌に熱情も少なく、むしろ淡々とした感傷が自然の中にそがれてゐる。蟲麻呂の詠歌内容は、主として地方の人事風物伝説などである。それはやはり彼が地方役人として東国常陸の国に在留したことが大いに原因する。都を離れたわびしさは、藤原宇合の詩(八九、以下詩の番号は大野保氏「懷風藻の研究」の番号による)「褰帷独坐辺亭夕(後漢賈琮的故事)、懸楊長悲揺落秋(後漢陳蕃的故事)」をまつまでもなく、蟲麻呂にとつても同様で

あり、歌の題材が地方に関するものが多いのは自然の勢であらう。一体、「日本書・紀」(日本紀)の如き史書が編纂され、風土記の如き地誌が述作されることは、文化の反省期に於て行はれる場合が多い。伝説を集録し、伝説歌をよむことも、伝説に関する一種の反省かへりみであり、時は反省期にあたる。伝説はもともとおほらかな民衆の生んだ口承文芸(oral art)であるが、やがて反省の手段としてこれを筆に求める時が来る。しかしこれを筆の上に上らせるためには、漢字と云ふ厄介なものがあつた。この厄介物を驅使させるためには、それ相應の漢才からさへがなくてはならない。伝説歌人はやはり筆のもてる人を必要とする。かうした時代は万葉集で云へば、第二期末から第三期にあたる。山上憶良が遣唐使栗田真人と共に帰朝(704)、続いて第八次の使が養老二年帰朝(718)。そこに伝来した書籍の多かつたことは想像にかたくない。この二つの文化移入期を中心として記紀風土記の述作をみる。かうした星の下にあつたのが蟲麻呂であり、また旅人・憶良であつた。いはばこの期は最も盛んな漢文学移入期とも云へる。裏返へせばわが国有文学の反省期進展期でもある。筆による伝説歌の生れる契機も自らそこに芽生へてゐたのであつた。



奈良の都に於て発言力の大きなものは政治家である。政治家(官人)は同時に文人(歌人、詩人)でもあることを必要とする。その中にあって、大臣長屋王(懷風藻では「長王」とも云ふ)は両者を兼備し、奈良文壇の後援者バトロンでもあつた。長屋王の系譜上の如し。

すなはち、王は壬申の乱(672)に於ける第一の功労者高市皇子の長子、母は天智系の出身。憶良帰朝と同じ年(704)従四位上へ。以後宮内卿、式部卿、大納言、右大臣(721)を経て、神龜元年二月(724)正二位左大臣となり、位人臣を極む。天平元年(729)二月、漆部君足らの「長屋王私学」左道、欲傾よこむ国家」の訴へにより、その邸は包围せられ、遂に自尽、時に年四六歳(或は五四歳)、誠にはかなき人の生涯を終へた。その自尽の原因については、遠い原因の一つとして壬申の乱が数へられるであらう。或はまた藤原氏との対立もその一因である。しかしそれについて考察することは、本稿の目的とされる。長屋王の文苑につらなる文学、その文学史的意義をここで説かうとするのである。

二 万葉時代第一期末の文学、特に天智の近江朝廷を中心とする文学に於ては、歌は勿論のこと、詩文も数多作られた。

懷風藻の序文に、

及至^レ淡海先帝之受^レ命也……於是三階平煥、四海殷昌、^{すめらみこと}旒無為、^{おほやけ}巖廊多纘暇、^{アルイハ}旋招^ニ文学之士、^{ヨリヨリ}時開^ニ置體之遊、当^ニ此之際、宸翰垂^レ文、賢臣獻^レ頌、彫章麗筆、非^ニ唯百篇、但時經^ニ亂離、悉從^ニ煨燼、云々

とみえる如く、主として酒宴の際に君臣唱和の詩が数多詠ぜられた。尤も詩文の常として、この序文にもかなり多くの潤色がある。たとへば「三階平煥」の「三階」を例にすれば、天地人(日本文学類従本武田注、沢田注、杉本注)と解し、或は上星中星下星の三台星(大野注)と解す。しかし「周礼夏后氏世室九階、鄭玄曰、南面三、三面各二世」(文選西都賦李善注)とある如く、これは南面した三つの階を云ふ(世良注に、聖天子の宮中を指す語とあり)。

左城^ハ右平、重軒三階、閨房周通……(西都賦)

三階。重軒、鏤檻^{フシビ}文櫺、右平左城……(西京賦)

はその一例である。また「平煥」の「平」は「右平」に同じ、何れも豪華を誇る宮廷の有様を述べたもの、文采(世良注)の意ではない。なほ西都賦に見える宮殿の壮華を形容した一句「煥^{トシテ}若^ニ列宿紫宮是環^ニ」の「煥」は、「平煥」の「煥」に当る。つまり「三階平煥」によって、近江朝廷の太平繁昌を表現したわけになる。しかし当時の情勢は必ずしも平和ではなく、朝鮮半島の問題も解決には至らなかった。従つて上の序文は割引して考へる必要があるが、琴酒の宴にまつはつて相当の数の詩歌の生れたことは断定してよろしい。万葉集(巻一、一六)に見える、「天皇^{天智}詔^ニ内大臣藤原朝臣^{キホヒフナレン}競^ニ憐春山万花之艷秋山千葉之彩^ニ時^ニ」云々も詩会に対する歌会の行はれた証拠となる。

詩歌の会は元来中国的なものである。顕宗紀元年(485)に於ける三月三日の曲水宴にしても、やがては奏樂と共に作詩の方向へと進む。これが朝廷を中心として行はれたとすれば、詩材として侍宴に関するものの多いことは自然の成り行きであり、懷風藻初期の詩——近江朝のものは残らないが——に侍宴、応詔詩の多いことは当然である。しかも侍宴の詩と云ひ、応詔の詩と云ひ、その大半は朝廷讃歌の、むしろしらじらしい詩であり、未だ歌の幾分の一も、自己の思ひを詠ずるには至らない(前期の詩については他の機会をまつ)。

前に述べた如く、奈良遷都(710)以後八年にして長屋王は大納言となり(718)、養老五年(721)右大臣、神龜元年(724)左大臣に進む。彼の歌は万葉集に五首。

うちま山朝風寒し旅にして衣借すべき妹もあらなくに (七五)

わが背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり妻待ちかねて (二六八)

は、何れも式部卿以前の作 (前者は従三位ごろの作)。

佐保過ぎて奈良のたむけに置く幣は妹を目離れず相見しめとぞ (三〇〇)

磐が根のこしき山を越えかねて哭には泣くとも色に出でめやも (三〇一)

味酒三輪の祝が山照らす秋のもみち葉散らまく惜しも (一五七)

のうち、万葉集の歌の配列や続日本紀に見える官位の昇進状態より考えて、前二者は奈良遷都以前の作、後者は右大臣時代を下らない後期の頃の作かと推定される (「萬葉集年表」年次不明とする)。また懷風藻に詩が三首。その一つ (六七、元日宴心詔)、

年光泛_ニ仙籟_一 ギョ 新しき光は御苑に浮び、

月色照_ニ上春_一 むつき 月色は正月を照らす

玄圃梅已放 きみがその 玄圃に梅は已に開き、

紫庭桃欲_レ新 みには 紫庭に桃は新しく咲かむとす

柳絲入_ニ歌曲_一 しらべ 柳の絲 歌の曲に入り、

蘭香染_ニ舞巾_一 ひれ 蘭の香 舞の領巾に染む

於_レ焉三元節 この日元旦の節、

共悦望雲仁 共に深き御仁徳を悦ぶ

(以下、詩句の問題となるもののみに私注を加へる。「梅已放」は群書類従本その他に「梅已故」(梅はすでに舊り)とあり、次の句の「欲_レ新」に對して、この「故」の本文がよからう。「柳絲入_ニ歌曲_一」は、柳の枝を擬人化した表現にはちがひないが(大野注)、なほ諸注の如く樂府折楊柳の曲を下にふまへてゐるものと思はれる(庾信、春旦詩「楊柳成_ニ歌曲_一」)。二がみえるが、歌も詩も何れも平凡な作であり、後に説く如く、やはり文人としてよりもむしろ政治家としてパトロンの存在の方に重要な意義がある。

「長屋王の佐保邸」に於ては、春秋を問はず、しばしば文華の苑が開かれた。先づ参加者をあげると、左の如し
(○印は萬葉集に見える者、△印は疑はしき者を示す)
○長屋王 (二首)
○境部王 (一首)
△山田三方 (一首、序)
○背奈行文 (一首)
調古麻呂 (一首)
○刀利宣令 (二首、「賀三五年」を加へる)
下毛野蟲呂 (一首、序)
田中淨足 (一首)
○安倍広庭 (一首)
百濟和麻呂 (二首)
○吉田 宣 (一首)
箭集蟲麻呂 (一首)
大津 首 (一首)
○藤原総前 (一首)
○藤原宇合 (一首)
塩屋古麻呂 (一首)
伊支古麻呂 (一首、「賀三五年」を加へる)
(備考) ほかに釈道慈「初春在竹溪山寺」於長王宅「宴追致辭」の序と詩、山上憶良参加の歌一首(萬葉集二五九)あり。
これらの詩を通じて、その表現について考察を進めよう。まづ新春の詩より(注は問題のあるところのみ、以下同じ)。
新年寒氣尽 新しき年、寒氣尽き、
50 宴長王宅 (境部王)

長屋王の佐保邸(作寶樓)に於ては、春秋を問はず、しばしば文華の苑が開かれた。先づ参加者をあげると、左の如し
(○印は萬葉集に見える者、△印は疑はしき者を示す)

○長屋王 (二首)

○境部王 (一首)

△山田三方 (一首、序)

○背奈行文 (一首)

調古麻呂 (一首)

○刀利宣令 (二首、「賀三五年」を加へる)

下毛野蟲呂 (一首、序)

田中淨足 (一首)

○安倍広庭 (一首)

百濟和麻呂 (二首)

○吉田 宣 (一首)

箭集蟲麻呂 (一首)

大津 首 (一首)

○藤原総前 (一首)

○藤原宇合 (一首)

塩屋古麻呂 (一首)

伊支古麻呂 (一首、「賀三五年」を加へる)

(備考) ほかに釈道慈「初春在竹溪山寺」於長王宅「宴追致辭」の序と詩、山上憶良参加の歌一首(萬葉集二五九)あり。
これらの詩を通じて、その表現について考察を進めよう。まづ新春の詩より(注は問題のあるところのみ、以下同じ)。

50 宴長王宅 (境部王)

新年寒氣尽

新しき年、寒氣尽き、

上月淑光輕

正月の淑光よき輕やかなり

送雪梅花笑

雪を送りて梅の花はな笑き、

含霞竹葉清

霞を含みて竹葉清し

歌是飛塵曲

歌は飛塵の曲、

絃即激流声

絃は激流しりべの聲

欲知今日賞

今日の賞宴を知るには、

咸有不帰情

みな帰るを忘る情をもつてす

「送雪」は雪の消えた意（杉本注）ではなく、「送」はこちらに送るもたらすの意（盧昇隣、含風蟬「急響送秋風」）、雪の中に梅花の咲くの意。「竹葉」は脊後に酒宴を暗示させる、「竹葉裁衣帶、梅花尊酒盛」（徐陵、春情）、「竹葉離樽滿、桃花別路長」（駱賓王、秋日尹大赴京）などその一例で、竹葉と花との対比は詩の常套法の一つ。「飛塵曲」は梁塵の故事をさすが（諸注）、次の句も伯牙鍾子期の流水鼓琴の故事（呂氏春秋、列子など）を含むとみるべきもの。「欲知」は六朝以来の語法（梁簡文帝、蓮舟買荷度「欲知船度処、当看荷葉開」。同、秋閨夜思「欲知妾不寐、城外擣衣声」）、一般に終り二句目に置く。今日の宴の様子を知らうとおもふならば、皆が不帰の情のあるのを見るがよい、不帰の情によって今日の様子が知られるの意。

(75) 初春於左僕射長王宅讌（百濟和麻呂）

帝里浮春色

帝里に春色みやこ浮び、

上林開景華

上林に春景を開く

芳梅含雪散

香くはしき梅は雪を含みて散り、

嫩柳帶風斜

若き芽の柳は風を帯びて斜なり

庭燠將滋草

庭暖あたたかにして滋むとする草、

林寒未笑花

林寒うして未だ咲かざる花

鶉衣追野坐

賤者（の衣）は野の遊びを追ひ、

上林苑 春日出遊園賦
林表 大と生花
芳辰 追て野坐
貴人(の車)は山家に入る
芳舎に俗塵の思ひ寂まり、
詞場に風流の響かまびすし
琴樽の興趣いまだやまず、
習池の車に載する酔る人もなし

鶴蓋入山家
貴人(の車)は山家に入る

芳舎塵思寂
芳舎に俗塵の思ひ寂まり、

拙場風響譁
詞場に風流の響かまびすし

琴樽興未已
琴樽の興趣いまだやまず、

誰載習池車
習池の車に載する酔る人もなし

(帝里は晋書王導伝に「建康古之金陵、旧為帝里」とあるが、ここでは奈良の都をさす。王勃の詩に「帝里寒光尽」(春日宴樂遊園賦)、「帝里金華去」(扶風屋居離京浸遠)など多くの例をみる。「上林」は漢の武帝のひらいた禁苑、上林苑、ここでは長王の林苑をさす。「鶉衣」は諸注の説く如く貧者のほろ服、敝衣(出典、荀子大略篇)であるが、次の句をあはせて、賤者と貴人とを対比して、賤者のみが野坐を追ふの意ではなく、貴賤を問はず長王宅の宴(野坐、山家)に加はるの意とみるべきであらう。「拙場」は意味不明(澤田注「弊屋の庭」、世良注もこれに近い)。「詩場」(杉本注)、「仙場」(大野注)などの説字説もある。王勃の詩に「何場」の例多く、沙場・文場・名場・得性之場・詞場などその例。かりに「詞場」(送白七序「吐詞場之珠玉」とみなし、後考をまつ。)

(82) 於左僕射長王宅宴(箭集蟲麻呂)

靈臺披広宴
靈臺に広宴を披き、

宝罍飲三琴書
寶杯をめぐらして琴と書とを飲ぶ

趙堯青鸞舞
趙は舞ふ青鸞の舞、

夏踊赤鱗魚
夏は踊らす赤鱗の魚

柳条未吐緑
柳の條はいまだ緑の芽を吐かざるに、

梅蕊已芳裾
梅の蕊は早やも裾にかほる

即此忘歸地
この地帰るを忘るるよき地、

芳辰賞回舒
芳辰の賞述べがたし

(「靈臺」は文王の靈臺(毛詩)を長屋王の邸にたとへたもの。「宝罍」は「玉罍」に同じ(駱賓王、秋菊「玉罍竟誰

同」。第三句の「趙」は漢の成帝の愛した趙飛燕（澤田注、大野注）、第四句の「夏」は鄭穆公の女の夏姬と解する（大野注）。しかし「趙」は古詩に「燕趙多佳人、美者顏如玉」、文選別賦「燕趙歌今傷美人」とみえる如く、美人の多かった国名をさし（玉台新詠にも数例あり）、「夏」もやはり国名とみるべきであらう。「赤鱗魚」の出典は別賦「簞^{アツ}洌魚之赤鱗」の季善注の「韓詩外伝曰、昔伯牙鼓琴而洌魚出而聽、瓠巴鼓琴六馬仰秣」（長笛賦の季善注には、このほか淮南子や列子、孫卿子の例をもひく）による（王勃、歸仁県主墓誌「躍^ニ頽鱗於瑞浦」の例あり）。二句は、趙の美人は青鸞の舞を舞ひ、夏（禹の建国した国、禹の樂を大夏と云ふ）の音楽は魚を踊らすの意で、長屋王の酒宴の盛大さをのべたもの。「忘^レ歸」は楚辭九歌に出典をもつことば。

(84) 春日於^ニ左僕射長王宅^ニ宴（大津首）

日華臨^レ水動 ひのひかり 日華は水に臨んで動き、

風景麗^ニ春^ニ堀^ニ 風景は春の庭に麗はし

庭梅已含^レ笑 庭の梅は已に笑を含めども、

門柳未成^レ眉 門の柳ははまだ芽吹かず

琴樽宜^ニ此^ニ處^ニ 琴樽は此處に宜しく、

賓客有^ニ相^ニ追^ニ 賓客は相つづけり

飽^レ德良為^レ醉 德に飽きて誠に酔ひぬ、

伝^レ盞莫^ニ遲^ニ々^ニ 盞を傳すこと遅々たることなけれ

(106) 春日於^ニ左僕射長屋王宅^ニ宴（塩屋古麻呂）

ト^レ居傍^ニ城闕^ニ 居をトへて城闕に傍り、

乘^レ興引^ニ朝冠^ニ 興に乗じて朝冠を引ぶ

繁^ニ絃^ニ弁^ニ山^ニ水^ニ 繁き絃の音は山水を弁別け、

妙^ニ舞^ニ舒^ニ齊^ニ統^ニ 妙なる舞は齊統を舒ぶ

柳^ニ条^ニ風^ニ未^レ煖 柳の條に風はまだ煖く、

梅花雪猶寒

梅花に雪は猶寒し

放情良得所

情を放るに良によき處、

願言若金蘭

願言は金蘭の如き交りをせむ

（第三句は伯牙の琴を聴き、その志の泰山江河の如きを聴きわけた鍾子期のお話を詠じたものであるが（澤田注）、第四句も故事即ち漢の成帝の寵愛を失った班婕妤が自ら傷んで怨詩を作った、それを下に詠じたもの。玉台新詠、怨詩に、

新裂齊紈素、鮮潔如霜雪（文選、怨歌行にもみえる）

とある。「願言」は毛詩以来の詩語。但しこれには（陶淵明の詩を例にする）、

（一）「願言懷人、舟車靡從」（停雲）、「願言不獲、抱恨如何」（同）の如く、オモヒテ（「言」は助字）の意と

（二）「願言誨諸子、從我潁水濱」（示周續之祖企謝景夷三郎）、「一朝長逝後、願言同此歸」（詠三良）の如くネ

ガハクハの意がある。ここは天和版本の「願言若金蘭」ではなく（二）の意であり、金蘭の交りを願ふの意。

（69）初春於作室樓置酒（長屋王）

景麗金谷室 景色は麗し金谷の室

年開積草春 年は明く草茂き春

松烟雙吐翠 松も煙霞とともに翠を吐き、

桜柳分含新 桜も柳もおのがじし新を含む

嶺高闌雲路 嶺は高し暗き雲の路に、

魚驚乱藻浜 魚は驚く乱る藻の濱に

激泉移舞袖 激泉に舞の袖を移せば、

流声韻松筠 流声は松と筠とに響く

（積草は「鸚鵡洲中草如積」（王勃、春思賦）とみえる如く、春草は茂るとみなしたものの、ここでは春の形容であり、まだ草は茂ってゐない。「魚驚乱藻浜」は類句として「見遊魚之戲藻」（梁簡文帝、晚春賦）などがある。）

これらの五言詩は同じ宴で詠ぜられたものではない。詩題中に「左僕射長王」ともあって、神龜元年以後（長屋王の死まで数年）と推定されるものあり、長屋王の最盛期を思はせる頃の作をも含んでゐる。しかしその手法は一聯のスタイルを持ち、時候・風物（梅雪柳など）・宴会（琴舞、管絃）を詠じ、最後にその宴の讃辭に至る。また語句の使用については、六期詩にみえるもののほかに、初唐の王勃・駱賓王などのよく使用した語句のみえることは注意すべきであり（注にはそれに注意を払った）、これは懷風藻の詩が六朝詩の借用のみに終始しないことをまづ意味する。

左大臣に就任の初秋七月、七夕の夜を期して、詩歌の会が催された。元来曲水宴と云ひ七夕の宴と云ひ、中国に模倣したこれ等の年中行事は先づ朝廷に於て行はれたが、やがて民間にも流行し、特に貴族官吏の間では詩文の集ひが催された。七日の夜、薄官山上憶良も長王の詞苑に参加。

ひさかたの天の河瀬に船浮けて今宵か君が我許来まさむ（神龜元年七月七日夜、左大臣家、一五二九）

の歌はそれであり、織女星の思ひをのべたもの（憶良の作歌活動はこの頃より次第に開始される）。長王宅に於ける秋宴の詩はその数しかも佳作もかなり多く、懷風藻に於て重要な部分を占める。

(66) 晚秋於長王宅宴（田中浄足）

再々秋云暮

再々として秋云に暮れ、

飄々葉已涼

飄々として木の葉已に涼し

西園開曲席

西園に曲宴を開き、

東閣引珪璋

東閣に珪璋を引く

水底遊鱗戲

水底に遊魚は戯れ、

巖前菊氣芳

巖前に菊香芳ふ

君侯愛客日

（今日は）君侯の客を愛する日にして、

霞色泛鸞觴

煙霞の色盃の中に泛ぶ

（「西園」は鄴都の西園（魏文帝、芙蓉池作「乘輦夜行遊、逍遙步西園」、長屋王の山齋をこれにあてた。「君侯愛客日」も恐らく曹子建の「公子敬愛客、終宴不知疲、清夜遊西園」、飛蓋相追隨」（公讌詩）を下に置いたもの。

公子は魏文帝をさし（李善注）、それを「君侯」（長屋王）に改めたのである。「珪璋」（毛詩、礼記など）はここでは俊秀の人々をさす（王勃、春日序「文詩泉涌、秀三天下之珪璋」）。二

90 秋日於左僕射長王宅宴（藤原宇合）

帝里烟雲乘なかつき季月きみ、

王家山水送しま秋光きみ、

霜しも蘭白露未催もよほ臭かほり、

泛す菊丹霞自有す芳かほり、

石壁蘿衣猶自短、

山扉松蓋埋しか然長、

邀遊已得あそび攀す龍鳳うたけ、

大隱何用かくれびと覓もとめ仙場、

（諸注「乘」については、いまだ適確な解をみない。この「乘」は初唐詩に多く用ゐられ、

乗のり月披のり金帳、連のり星解のり瓊佩、（王勃、懷仙）

已のり乘のり千里興、還撫のり三弦琴、（盧照隣、宿玄武）

などその一例。季秋にさそはれて（季秋をしのいで、犯して）都に烟雲のたちこめてゐる形容。「泛のり菊」は菊酒（淵明の故事）に浮ぶの意にもとれる。「埋然長」は意味不明（「埋」は「理」の誤か）。「攀龍」は貴人に陪する意（出典、後漢書光武紀）であり（王勃、為のり人のり与のり蜀城父老書にも「諸葛攀龍之日」の例あり）、「攀桂」の意と混同した大野注には従へない。終り二句は、長屋王の宴に加はることができたので、仙境に入る必要はないの意。「何用」の「用」を諸注「用ゐむ」とよんでゐるが「用」は「以」に等しく、「何用」は「何以」に同じ。「何」の下につく助字「用」は「用ゐむ」とよむ必要はない。）

以上二首は晩秋九月の作。時期は必ずしも同じ時ではない。

秋宴の詩に於て最も注意すべきは、新羅客と別れを惜む詩会である。その年月については、

(1) 養老三年閏七月新羅使帰国 (719) 長屋王大納言

(2) 養老七年八月帰国 (723) 同 右大臣

(3) 神龜三年七月帰国 (726) 同 左大臣

の三つの場合が考へられる。何れも可能ではあるが、新羅使を宴する大役を考慮に入れると、左大臣就任以後がふさはしく、その点、神龜三年の秋とみるべきではなからうか。特に「初秋」云々とある調古麻呂の詩(62)をこの時の作とすれば、神龜三年が最もふさはしくなる(但し作詩は必ずしも同日とは云へない)。この宴で最も注意すべきははじめて詩序(序文と詩)があらはれたことであり、日本漢文学史上に於ても特記すべきことである。この形式は天平初期に於て(万葉第三期)、大伴旅人・山上憶良の作品の、ひいては第四期大伴家持・池主の作品の歌序(序文と歌)の先蹤となったものである(歌序については別の機会をまつ)。一体かうした詩序は主として初唐詩(王楊盧駱の初唐四傑の詩などを中心とする)に多く見え、特に王勃や駱賓王の詩序には、すぐれた送別の宴の作が残る。王勃集(もとは三十巻)は「詩序」と銘うってわが正倉院に残り、その書写は慶雲四年七月廿六日(707) 栗田真人・山上憶良等の帰朝の際に(704) 舶載されて伝来したかとも思はれる。降って奈良朝の文人達には十分利用できるやうになつてゐた筈であり、王勃集の詩序の形式が文学に採用されたのもゆゑなしとしない。かうした面より長屋邸に於ける新羅客を宴する詩群を眺めてみよう。

三 秋日於長王宅宴新羅客并序(山田三方)

詩序(序)の常としてまづ総論より始まるものが多いが、この序に於ては、直ちに主人公長屋王のことに始まる。初唐詩序の冒頭の句、

張。二。官。松。鶴。乘。間。桂。筵。追。賞。引。簪。裾。之。勝。侶。(王勃、夏日宴張二林亭序)

尹。大。官。三。冬。懸。暢。指。蘭。臺。而。拾。青。薛。六。郎。四。海。情。深。飛。桂。樽。而。舉。白。(駱賓王、秋日餞尹大往京序)

もその一例。この序は、駱賓王の例の如く、君王(長屋王)と使人(新羅客)との対比で始まる。

君。王。以。敬。愛。之。沖。衿。広。關。琴。樽。之。賞。

△△ 使人承敦厚之榮命、欣載鳳鸞之儀。

右の対句のうち「鳳鸞之儀」については、尚書の鳳凰來儀の故事により端鳥來る聖代の意と解するもの(杉本注)と長屋

王の容儀を鳳鸞にたとへたもの（大野注）との二説が対立する。「鳳鸞」と同じ「鸞鳳」は王勃の詩序に例が多い。次の
子雲筆札、擁鸞鳳於行間（冬日羈遊汾陰、送韋少府入洛序）

吐詞場之珠玉、作朝廷之鸞鳳（送白七序）

の例は、すぐれた文章のことに喩へる（文選、吳季重、答魏太子牋「擿藻下筆、鸞鳳之文奮矣」）。それをそのままここに応用することは、「琴樽之賞」に対して多少の可能性もある。しかしほかに「珠玉在傍、鸞鳳虬竜之君子」（王勃、秋日遊蓮池序）の例もあり、新羅客の側からみて、長屋王の容儀を云ったものとする説に従ふべきであらう。

次に宴の描写へと進む。総論から宴の模様に移る場合、初唐の詩序は「于時」（最も例多し）、「是以」（「茲以」、
「粵以」など）などの接続助字を以てするのが一般であるが、「於是」の例もあり（「駱賓王、秋日餞陸道士陳文林序」
など）、この詩序は「於是」を使用する。

於是琳瑯滿目、

蘿薜充筵

（玉俎雕華、列星光於煙幕、
珍羞錯味、分綺色於霞帷）

（羽爵騰飛、混賓主於浮蟻、
清談振發、忘貴賤於窓雞）

（歌臺落塵、郢曲与巴音雜響、
笑林開靨、珠輝共霞影相依）

酒肴珍味滿ち、談論風発の酒宴の有様を述べたもの。「琳瑯滿目」は、「琳瑯觸目」（王勃、秋日遊蓮池序）、「召琳

瑯而觸目」（楊炯、崇文館宴集詩序）などと同じく美玉即ち俊才の数多参加するを意味し、「新知滿目」（王勃、秋日楚州郝

司戸宅餞崔使君序）と類似の表現。「蘿薜」は「蘿裳」（王勃、秋晚入洛、於畢公宅別道王宴序）と同じく、蘿裳を着たも

の即ち在野の士を意味する。「混賓主於浮蟻」の「混」は初唐詩序に多く用ゐられ、「混榮辱於是非之境」（楊炯、晦

日藥園詩序）、「志混榮枯」（王勃、秋日宴洛陽序）などその一例にすぎないが、ここは恐らく「居榮命於中朝……混

以蘿裳……賓主由其莫弁」（王勃、秋晚入洛、於畢公宅別道王宴序）の「混」に由来するものであらう。（○印はすでに

あげたこの詩序の語句と一致するもの）。「忘貴賤於窓雞」の「窓雞」は諸注指摘の如く世説新語に見える晋の宋処宗の故事。

これは異苑にも見え、王勃「霞明春暉」、即対談雞」（梓州慧義寺碑銘）、駱賓王「座接雞談」（冒雨尋菊序）などもこ

れに同じ。「貴賤」は王勃の詩に例は多いが、この一句は、駱賓王の「一言忘賤貴」（夏日遊德州贈高四并序）に類似する。

次に長王宅の風景へ移り、「于時」で始まる。これも詩序の常套技法の接続詞のひとつ。

于_レ時_二露凝_三良序_一、_二寒蟬唱而柳葉飄_一、_二小山丹桂、流彩別愁之篇_一、

風_二軋_三商郊_一、_二霜雁度而蘆花落_一、_二長坂紫蘭、散馥同心之翼_一、

右の前半に見える露・風・蟬・雁・柳・蘆などを詠みこむことは、やはり初唐の詩文に見る材料であり、

金風生而景物清、白露下而光陰晚、庭前柳葉、纔聽_三鳴蟬_一、_二一本「蟬鳴」_一、野外蘆花、行看_三江上_一、_二王勃、秋日宴季處士宅序_一

露、金薰_三藕岸_一、風、珮搖_三蘭坂_一、蟬、鳴稻葉秋、雁、起蘆花晚、_二駱賓王、在江南贈宋五之問_一

など皆同じ。蟬と云へば柳を云ひ、雁と云へば蘆が現れ、_二霜、雁、嚙_三蘆_一……寒蟬噪_三柳_一、_二駱賓王、秋日餞_三陸道士陳文林序_一、

上の前半は初唐詩によつてワクをはめられた表現である。後半の「小山」「長坂」はそれぞれ淮南王小山、魏文帝の故事

（諸注）。そのうち問題となる句は「散_三馥同心之翼_一」の「翼」であり、「曲」の誤りとみるもの（吉田増蔵氏説、改造社版

「日本文学講座」特殊研究篇）、或は同心鳥にちなんで主と賓とを鳥に見立てたもの（大野注）などの異説がある。鳥は翼を

ならべ、同心をなして飛ぶこと、梁簡文帝「燕作_三同心飛_一」（春日詩）、王勃「喜_三鴛鴦之接翼_一」（仲氏宅宴序）その他に見

える。ここも「長坂紫蘭」に続くとするれば「同心之言」などが普通の表現であるが、それを避けて比翼の鳥の「翼」とし

たのであり、誤字とみるにはあたらぬ。

次のこの序は、結びに近づき作詩をしようとする心構へや決意の段取りになる。

日云暮矣、_二醉我以_三五千之文_一、既舞_三踏於飽德之地_一、_二請写_三西園之遊_一、_二含毫振藻_一、

月將繼焉、_二博我以_三三百之什_一、且狂_三簡於叙忘之場_一、_二兼陳_三南浦之送_一、_二式贊_三高風_一云爾。

「五千之文」は諸注老子五千余言をさすとあるが、「何用_三子雲玄_一」（64）とある如く、楊子雲解嘲の「顧然而作_三太玄五千文_一」（文選）をさすものとみるべきである。この結びもまた詩序を参考にしたもの。「請_三写西園之遊_一」の「請」は諸本すべて「清」に作るが、これは誤であり、「請」（吉田増蔵氏説）が正しい。これは、詩序の結びに近い箇処に、

請_三揚_三文筆_一、共記_三良遊_一、_二王勃、秋日楚州郝司戸宅、餞_三崔使君_一序

請_三開_三文園_一、共瀉_三詞源_一、_二同、江寧吳少府宅餞宴序_一

請_三振_三詞鋒_一、用開_三筆海_一、_二駱賓王、秋日餞_三尹大往_一京序

などとあるによって明かである（万葉集卷五梅花歌序の、問題の「詩紀落梅之篇」も、版本「請紀落梅之篇」の本文によって始めて正しい解釈が生れるが、他日を期す）。また「含毫振藻」も、「含毫」（王勃、送三字文明府序）、「振飛魚之藻」（駱賓王、秋日餞三輔錄事使三西州序）など結びに近い部分に用ゐられ、「式……云爾」の結びも「式治三樂事云爾」（駱賓王、秋日於益州李長史宅宴序）など例は多い。「高風」は王勃「仰高風」（仲氏宅宴序）とある。また「飽德之地……叙志之場」の型も、王勃「逍遙皆得性之場、動息並自然之地」（秋日宴三季處士宅序）にみられ、要するにこの詩序の結構と云ひ文辞と云ひ、初唐詩の序を参考にしたことが明かである。次に五言八句の詩がこれに続く。

②白露懸珠日

白露珠を懸くる日、

黄葉散風朝

黄葉風に散らふ朝

對揖三朝使

三朝の使を對揖し、

言尽九秋韶

言に九秋の韻を尽くす

牙水含調激

伯牙の水は調べを含みて激ち、

虞葵落扇飄

虞の葵は扇に落ちて飄る

已謝靈臺下

已謝靈臺下に、

徒欲報瓊瑤

つたなくも瓊瑤のところに報いむ

（第七句「已謝靈臺下」（群書類従本）を諸本「已謝靈臺敏」とあり、杉本氏の訓に「已より靈の台の敏かなるに謝ちぬ

を」（「国語と国文学」三三年十月）とあるが、俄かに従ひ難く、謝を感謝の意にとり右のやうに訓む。）

長屋王邸に於ける新羅客を要する一群の詩には賦字がある（右の詩にはそれがないために、多少の疑もあるが、恐らく当時の作であらう）。某字を取って韻となし、その韻字によって詩を作することは、遠く六朝以来のことであるが、その詩式を追うて初唐にも益々行はれ、たとへば太宗を中心とする宴に於ては、「侍宴中山詩序」（許敬宗序）によれば各人一字を採って韻字となしてゐる（「所謂翰林学士集」）。王勃・駱賓王にも、

上巳浮江宴、韻得遙字。春日宴樂遊園、韻得接字など（王勃）

送郭少府、探得憂字。送宋五之問、得涼字など(駱賓王)

など例が多く、この詩序の賦字は直接初唐の詩法から学んだものであらう。「風」(60)、「稀」(63)、「前」(65)、「烟」(68)、「流」(71)、「時」(77)、「秋」(79)、「難」(86)が各人の用ゐた韻字である。以下それらの詩並びにその序について眺めてみる。

(60) 秋日於長王宅宴新羅客賦得風字 (脊奈王行文)

嘉賓韻小雅嘉賓小雅を韻ひ、

設席嘉大同席を設けて平和を嘉みす

鑒流開筆海流れを鑒ては筆をふるひ、

攀桂登談叢桂を手折りてはよく談る

盃酒皆有月盃酒に皆月の影ありて、

歌声共逐風歌声は皆風を逐うて流る

何事專対士何事ぞ、專対の士

幸用李陵弓幸李陵が弓を用ゐむとは

(「嘉賓」を「賓ヲ嘉ミシテ」とよむ説(大野注)はとらない。「大同」は莊子の大同(澤田注)ではなく、礼記礼運、大同の鄭注「同猶和也、平也」に従ふ。「筆海」「談叢」ともに駱賓王の詩文に多く、その一例。

談叢散馥、輶餘氣於九蘭、筆海流瀾、駭洪波於八木(上瑕丘韋明府啓)

惠牛曜弁、驚荀鶴於談叢、楊鳳摛文、詠離龍於筆海(上郭替府啓)

またほかの初唐詩にもこの二語の例は多い(「談叢」の一例、王勃「初春於權大宅宴序」に見える)。「攀桂」は高位高官に登るの意ではなく、「筆海」に対して「鑒流」と云った如く、「談叢」と「攀桂」(出典、淮南王劉安、招隱士)と縁語をなす。六朝初唐詩に例が多く、桂を引きたはめてそこに留り高談風発するの意。終りの二句の意は後考をまつ。「何事」の「事」は軽く添うた助字(六朝詩の例、左太冲招隱詩「何事待嘯歌、灌木自悲吟」)。

(63) 秋日於三長王宅一宴三新羅客賦得 (刀利宣令)

玉燭調三秋序一

四時の和、秋の季節を調へ、

金風扇三月幃一

秋風は月の帳を吹き扇ぐ

新知未幾日一

新に知ること幾日も経ざるに、

送別何依依

送別何ぞ依々として耐へ難き

山際愁雲断

山の際に愁雲は断えたれど、

人前樂緒稀

人の前に樂緒は稀なり

相顧鳴鹿爵

鹿鳴の爵を顧りみて、

相送使人帰

使人の帰るを相送らむ

(上二句「玉燭調三秋序」)

(周明帝、過三旧官詩)、「金風扇三素節」(張景陽、雜詩)など六朝以来の類句をまねたもの。

「新知」の例(玉台新詠にすでに二三例あり)、王勃「郷党新知、掃顔回之陋巷」(夏日登龍門樓寓望序)、「故人握手、

新知滿目」(秋日楚州郝司戸宅遇錢崔使君二序)に見え、また別れに際して立つ雲を「愁ひ」の雲と云った「愁雲」も、王

勃「緒愁雲於南北」(於越州永興李明府宅送蕭三還齊州二序)の詩に見える。)

(68) 於三宅一宴三新羅客賦得 (長屋王)

高旻開三遠照一

高き秋天に遠く夕映えして、

遙嶺靄三浮烟一

遙けき嶺に浮べる烟たなびく

有愛三金蘭賞一

金蘭と賞するを愛で、

無疲三風月筵一

風月の筵に疲ることなし

桂山餘景下

桂の山は餘れる景の下にあり、

菊浦落霞鮮

菊の浦は落霞に鮮やけし

莫謂滄波隔

滄波に隔ると云ふなかれ、

長王詞苑

長為壯思篇

長く為さむ壯思の篇を

〔桂も菊も秋の景物であり、ここに「桂山」「菊浦」の語が生れる。最後の句は諸本に「長為壯思延」(澤田訓「長く壯思に延かる」とみえ、「長く壯思にひかれて別離の情に堪へない」(澤田注)、或は「長くお互同志はさかなおもひにひかれてつながりが絶えないものと深く信ずる」(杉本注)などと解する。「壯思」は「高情壯思、有抑揚天地之心」(王勃、遊冀州韓家園序)の例もあり、宴席に於ける壮んな思ひの意。「延」は少し無理であり、群書類従本「篇」に従ふ。「延」は尾州本、天理本などにみえるが、第四句の「延」と重複する)。「篇」は懷風藻に「別愁之篇」「西傷之華篇」などとあって、詩篇をさす。結局は新羅とわが国とは一衣帶水、大して遠くはない、いつ迄も壯思を詩によつて晴さうの意に解する。〕

(71) 秋日於長王宅宴新羅客賦得流字(安倍広庭)

山牖臨幽谷

山の窓は幽き谷に臨み、

松林対晩流

松の林は夕暮れの流れに對ふ

宴庭招遠使

宴の庭に遠き使を招き、

離席開文遊

別れの席に文の遊びを開く

蟬息涼風暮

蟬は息む涼風の暮、

雁飛明月秋

雁は飛ぶ明月の秋

傾斯浮菊酒

この菊を浮べる酒を傾け、

願慰転蓬憂

転蓬の憂を慰めむ

〔「臨對」の語法の一例、「此夜乘槎之宮、猶對仙家、坐菊之賓、尚臨清賞」(王勃、秋日宴李處士宅序)。「転蓬」は風に吹かれてあちこちに飛ぶ蓬の意であり、転蓬の憂とは、旅にある新羅の客の憂をさす。万葉集卷五に「蓬客」の例もある。〕

(77) 秋日於長王宅宴新羅客賦得時字(百濟和麻呂)

勝地山園宅

うるはしきところ 勝地は山園の宅にして、

秋天風月時

ときは 秋天風月の候

置酒開桂賞

まけ 酒設て桂賞を開き、

倒屣逐蘭期

くつ 履を倒にして蘭期を求む

人是雞林客

しんぎ この人を雞林の客にして、

曲即鳳樓詞

しらべ 曲はこれ鳳樓の詞

青海千里外

あをうなばら 青海千里の外、

白雲一相思

白雲の中に一たび相思はむ

(「勝地」は王勃の詩に多い(秋日宴洛陽序「東京勝地、南呂高秋」、秋日錢別序「來勝地、則時雨涼風、助他鄉之旅思」)。「桂賞」の「桂」は「蘭」に對し、ともに香草である。ここでは修辭であり、「桂筵追賞」(王勃、夏日宴二林亭序)の意。「鳳樓曲」は簫の名手の蕭史・弄玉の故事によるものとする説がよい(大野注)。但しこの故事ならば「鳳凰曲」などであるのが一般であらう。「鳳樓十二重」(鮑照、代京洛篇)などの如く、鳳凰のゐる樓臺を長屋王邸に比し、そこで歌はれる酒宴の歌を、「鳳樓詞」と云ったものと思はれる。終り二句は一たび相思ふ毎に千里の駕を命じた嵇康の故事(大野注)をもち、別れた後には白雲たちこめた青海千里の外より、時々お互ひに相思ふであらうの意。)

(79) 秋日於長王宅宴新羅客賦得 (吉田宣)

西使言歸日

つかひ 西の使者ここに歸る日、

南登錢送秋

わかれ 南の方に登りて秋の錢送をなす

人隨蜀星遠

人は蜀星の遠き彼方に隨ひて去り、

驂帶斷雲浮

そへうせ 驂は浮べる斷雲を帯びて歸る

一去殊鄉國

一たび去れば國を異にし、

万里絶風牛

万里風塵を絶つ

未_レ尽_二新知趣_一

未だ新しき交りを尽さざるに、

還作飛乖愁

還に飛乖の愁をなす

〔「南登」がすこし突飛すぎるので「南望」(箋註)、「南堂」(杉本注)の説があり、また「南亭」(王勃、秋晚入洛、於畢公宅別道王宴序)などもその候補になる。しかしこのままでもとける。「南登」の例は多くみえ、

南登霸陵岸、廻首望長安 (王粲、七哀詩)

北渡黎陽津、南登紀郛城 (謝靈運、擬魏太子鄴中詩)

北辭伊闕、南登涵山 (王勃、感興奉送王少府序)

はその一例。但しこれらの例は高い所に登るものであり、この詩の表現には必ずしもピッタリしてゐるわけではないが。「蜀星」については、博物志に見える蜀の嚴君平の言ひあてた星、即ち牽牛星の意とする(大野注)もののほかは適切な解をみない。しかしこれは妥当な説とは思はれない。駱賓王の

星槎望蜀道、月峽指吳門 (送費六還蜀)

日觀分齊壤、星橋抵蜀門 (送吳七遊蜀)

より「蜀星」の語は生れたものと思はれ(虞九章注「蜀有七星橋、張儀所造、李膺益州記、星橋上応七星、一長星、二四星、三機星、四夷星、五尾星、六冲星、七曲星」)、新羅の西使が帰る方向にこの星があるとみたたもの。

「驂」は別離の詩に多い。その一例、

去。驂嘶別路、歸棹隱寒洲 (王勃、臨江)

長路曉而征驂動 (同、春夜桑泉別王少府序)

「新知」は既にあげた如く、王勃の詩に多い。)

(86) 秋日於長王宅宴新羅客 (賦得、藤原綏前)

職貢梯航使 職貢をもたらし梯航し使、

從此及三韓

今ゆ三韓へ帰りゆく

岐路分_レ衿易

岐路に衿をわかつことは易けれど、

琴樽促_レ膝難

琴樽に膝を促_レくることは難し

山中猿吟断

山中に猿吟断え、

葉裏蟬音寒

葉裏に蟬の音寒し

贈別無_二言語_一

別れに臨みてことばもなく、

愁情幾万端

愁情はとほと万端なり

（第三、四句が駱賓王の「岐路分_レ襟易、風雲促_レ膝難」（秋日別侯四）に直接よること、既に明かにされてゐるが（田村謙治氏「国語と国文学」二五年九月）、第七句「贈別無_二言語_一」も、駱賓王「贈別競無_二言_一」（送吳七遊蜀）によつたものである）

この宴には、前述の山田三方の詩序と詩のほかに、下毛野蟲麻呂の作も残る（秋日於長王宅宴新羅客并序、賦）。この序の構成も、概論・会の模様・風景・結び（執筆のかまへ）であり、その手法は初唐詩序と同じ。

夫秋風已發、張歩兵所以思婦、秋氣可悲、宋大夫於焉傷志

然則歲光時物、好事者賞而可憐

勝地良遊、相遇者懷而忘返

「夫」で始まる例、王勃「秋日宴洛陽序」「夏日登龍門樓寓望序」など例が多い。秋風云々は張季鷹的故事（世説、識鑿篇）、秋氣云々は宋玉の故事（楚辭九辯）。王勃の詩に「張季鷹之命駕、思動秋風」（秋晚入洛、於畢公宅別道王宴序）、「悲哉秋之為氣」（秋日餞別序）、「季鷹之思吳、命駕果為秋風」（還冀州別洛下知己序）とあるのは、それであり、共に有名な故事。「好事者」は風流士の意、王勃「門稱好事」（宇文德陽宅、秋夜山亭宴序）——漢書楊雄傳贊の「家素貧者酒、人希至其門、時有好事者載酒肴從遊學」——の例がある。「勝地」は王勃の詩に多いこと前述の如し。「良遊」も「好事」と共に上の王勃の秋夜山亭宴序にみえ、「相遇者懷而忘返」の如き句も、その序の「攀勝集而長懷」

に暗示を得たものかとも思はれる。

況乎皇明撫運、時屬無為一

(文軌通而華夷翕欣戴之心、
礼樂備而朝得歆娛之致一)

右は聖代の世の詩宴を叙したもの。「時屬無為」は王勃に「上属無為之道」(三月上巳祓禊)とあり、最後の句は、
類句として王勃「人多朝野之歆以嬉以遊」(秋日宴洛陽序)がある。

(長王以五日休暇、披鳳閣而命芳筵、
使人以千里羈遊、俯雁池而沐恩暉一)

これは王勃滕王閣詩序(秋日登洪府滕王閣餞別序)の「十旬休暇、勝友如雲、千里逢迎、高朋滿座」や、「群公以十旬
芳暇、候風景而延情、下官以千里薄遊、歷山川而綴賞」(江浦觀魚宴序)を応用したもの。「千里」は単に遠隔
をさすだけでなく、世説新語の「嵇康与呂安善、每相思、千里命駕」(簡傲篇)を下に含み、(7)の「千里」に同じ

於是彫俎煥而繁陳、芝蘭四座、去三尺而引君子之風一

(羅薦紛而交映、祖餞百壺、敷一寸而酌賢人之酌一)

総論より宴に移る描写の仲介として「於是」を設けること詩序(王勃、江浦觀魚宴序その他)の手法。「交映」は「芳筵
交映」(同、還冀州別洛下知己序)、「祖餞百壺」は「王公以傾餞百壺、別芳筵而促興」(同、春夜桑泉、別王少府序)
などの類句がある。

(琴書左右、物我兩忘、自拔宇宙之表、
言笑縱橫、枯榮雙遣、何必竹林之閭一)

この句は、王勃(秋晚入洛、於畢公宅別道王宴序)「是非雙遣、自然天地之間、榮賤兩忘、何必山林之下」によったこ
とすでに柿村重松氏の指摘したところ(「上代日本文学史」)。なほ云へば前にあげた「芝蘭四座」は王勃のこの序の一
句「英王八座」より、「言笑縱橫」も「泉石縱橫」(「玄談清論、泉石縱橫」)より暗示を得、また「琴書」「物我」
「宇宙」「竹林」など王勃の作にしばしばあらはれる詩語である。「枯榮」も「榮枯」に同じく、王勃のものに「志混榮

枯^二、得^二林泉之意氣^一」(秋日宴洛陽序)、「豈榮枯之足^レ道」(秋日楚州郝司戶宅、錢叢使君序)などみえ、盛衰の意。

此日也^{△△△} 溽暑方間、長臯向^レ晚

寒雲千嶺、涼風四域

白露下而南亭肅

蒼烟生以北林藹

草也樹也、揺落之興緒難^レ窮

鴈兮詠兮、登臨之送歸易^レ遠

この条は当日の風物天候を述べる。「此日也」は尾州本以下数本「是日也」とみえ、王勃の「別道王宴序」にも「是日也」とあり、以下この序を模して類句が作られる。即ち「白露下而南亭虛、蒼烟生以北林晚」の○印を改めて蟲麻呂の序が生れた(柿村氏指摘)。そのうち「白露下而南亭虛」を「南亭肅」に改めたのは、王勃の「白露下而清風肅」(秋日宴洛陽序)によったもの、即ち王勃の「別道王宴序」を主としながら、なほ秋日宴洛陽序の詩語をも加へたわけになる。「長臯」の「臯」は王勃に「江臯」「亭臯」など例が多く、ここでは文選秋興賦李善注の「臯沢」の意、「長臯」は王勃の「長洲」「長浦」の意に近い。「寒雲千嶺、涼風四域」は王勃「朔風四面、寒雲千里」(晚秋遊武担山寺序、柿村氏指摘)によったもの、「淳風」は版本に「涼風」とあるが、「淳風」の本文が正しい(王勃、秋日餞別序「白露涼風之八月」、詠風「涼々涼風生」)。終二句は潘安仁の秋興賦(杉本氏説)によったもの(或は宋玉、楚辭九辯)であるが、そのうち「送歸易^レ遠」は直接王勃の「送歸將^レ遠」(送李十五序)による。「鴈兮詠兮」の類句には「一鴈一詠」(冬日送儲三宴序)の例がある。

加^{△△}以、物色相召、烟霞有^二奔命之場^一

山水助^レ仁、風月無^二息肩之地^一

「加^{△△}以」の接続助字は王勃の詩序(樂五席宴群公序、秋日送王贊府兄弟赴任別序など)や駱賓王のそれ(秋日餞陸道士陳文林序)などに多く、前の描写に更に附加して次に描写への橋わたしをなすもの。「物色相召」以下の対句はその基本形が、楊炯原序の王子安集(王勃集)の、

動揺文律、宮商有_二奔命之勞_一
沃蕩詞源、河海無_二息肩之地_一

によったこと、既に指摘の如し(柿村氏説)。しかしその創作過程は更に複雑であり、これについてはかつて私見を述べたのでここでは繰返さない(国語国文、二七年一月号)。ただ一言補説を加へるならば、「物色相召」・「山水助_レ仁」は王勃の序に類句は多いが、「物名」と「山水」との句の結合は、恐らく駱賓王の「物色相召、江山助_レ人」(初秋登_二司馬樓宴序_一)に暗示を受けたとみるべきであらう。

請、_一染_二翰操_一紙、_一飛_二西傷之華篇_一、

即_二事形_一言、_一繼_二北梁之芳韵_一

人探_二一字_一、_一成_二者先呈_一

最後の一行の本文批評上問題であるが、諸注のうち大野注のみが問題を提起してゐるに過ぎない。「探」は一般に「操」に作るが、内閣文庫本(林家本来歴志本)の「探」に従ふ。「人探_二一字_一」は所謂「探字」(ここでは「前」の字)のこと、詩序に例が多い(王勃「夏日諸公見_二尋訪詩序_一」「春夜桑泉、別_二主少府序_一」など)。「成者」以下の本文は、駱賓王「初秋於_二寶六郎宅宴序_一」によって「成者先_二唱云爾_一」と推定した大野注は注意すべし。但し王勃「人探_二古韻_一、成者先呈」(秋日宴_二洛陽序_一)もその参考本文となる。特に東大本(陽春廬本)に「先」の下に「出」とあるのは、恐らく「呈」を「出」にあやまつたものであらう(呈、出、至など誤写される恐れあり)。何れとも決し難いが、大野注の本文よりもなるべく諸本に近く「成者先呈」の私案を提出する。(尤も「出」を活かせば「成者先出」でも同じ意味となる。)もとに戻つて、「即_二事形_一言」は「請賦_二一言、即_二事_一」(初秋於_二寶六郎宅宴序_一)によつたものであらう。次の「飛_二西傷之華篇_一、繼_二北梁之芳韻_一」のうち、後の句は楚辭九懷章句(「絶_二北梁今永辞_一」)の詩をさし、諸注(杉本注、大野注)の如く李陵・蘇武の河梁の別れの詩をさすのではない。「西傷之華篇」は難解であり、かつて私見をのべた(国語国文、十七卷五号)。これに附言すれば、この二句は王勃の「正悲_二西候日_一、更動_二北梁篇_一」(秋日別_二王長史_一)によつたものであり(世良注、この本文を引用)、
「西傷」は「西候」の誤写とみる(大野注もこれに従ふ)。西候は「斗建西之候」であり、秋の候の意、「西候之華篇」は宋玉の楚辭九辯や秋興賦などをさすことになる。尤も王勃には別に「請、投_二文於西候_一」(春夜桑泉、別_二主少府序_一)の例が

みえ、蔣清翊「王子安集註」に「孫楚有征西官属送於陟陽候作詩」とあるが（更に隋尹式詩「西侯追孫楚」をあげる）、この詩は懷風藻詩人には有名なものではなく、むしろ西侯も北梁も楚辞の詩篇（或は文選秋興賦）をさし、それらに匹敵すべき詩を作らうの意にとるべきであらう（杉本氏は毛詩大雅に本づき「西偏」の誤とみる）。但し「西傷」を誤のないものとみれば、西を傷む意、或は西の方に帰る新羅の客を傷む（世良注、西を思うて悲しみ傷むの意）、と解するより方はない。以上序は終り、詩がこれに続く。

(65) 聖時逢七百一

聖時 七百年に逢會り、

祚運啓一千一

祚運 千年に一たび啓く

況乃梯山客

況乃 山に梯かけ海を航え来し客、

垂毛亦比肩

毛髪もまた垂りて肩に比ぶ

寒蟬鳴葉後

寒蟬 葉後に鳴き、

朔雁度雲前

朔雁 雲前を渡る

独有飛鸞曲

独有 飛鸞の曲のみありて、

並入別離絃

並別離の絃に入る

（「七百」は周室の卜年の数（大野注）、文選の李蕭遠、運命論にも「卜年七百、天所命也」とある。「況乃」の語法は散文のみならず詩にも多い（駱賓王、至汾水戍「況乃霜晨早、寒風入樓戍」・「垂毛」云々は、楊炯、庭菊賦「及暮三年華、髮垂肩」の如く、新羅客も来朝して以来月を経たの意か、諸注もはつきりしない。「垂毛」の下「亦」は「亦」（杉本氏説前掲「国語と国文学」）ともよめるが、やはり前句の「七百」「一千」など年数の経過に対して云ったものであらう。「飛鸞曲」は「鳳凰曲」に同じ。「独有」の語法は、駱賓王「独有孤明月、時照客庭寒」（寒夜独坐遊子多懷簡知己）など、同じ「唯有」の例に比して案外例が少ない。）

なほ一群の詩群に伍して、調古麻呂の詩一首がある。これは探字を用ゐないために、別の日の詩かとも思はれるが、新羅使来朝の同じ年のものではないと云ひきれない、一度しかその宴が行はれたとも云へないから。何れにせよその表現はやはり前の詩群とかわりはない。

(62) 初秋於長王宅宴新羅客（調古麻呂）

一面金蘭席一たび面れば金蘭席

三秋風月時時は風月の三秋

琴樽叶幽賞ことさけよきあそび

文華叙離思ふでわかれのおもひ

人含大王德きみ

地若小山基ところは小山の基

江海波潮静ふもと

披霧豈難期霧を披きて再會の期を得ること豈難からめや

（「一面」は「三秋」に対する。王勃の「或三秋意契、關林院而開襟、或一面新交、叙風雲而倒屣」（宇文德陽宅秋

夜山亭宴序）、「叙風雲於一面、坐林苑於三秋」（九月九日採石館宴序）

もその一例。「大王」は「小山」（淮南王劉安の故事）に照して楚襄王をさすとの説がよく、長屋王を楚の襄王に擬したもの。終り二句目の「江海波潮静」云々は太平の世（大野注）をさすのではなく、文字通りに解すべきである。王勃の

詩の「遽悲春望遠、江路積波潮」（上巳浮江宴）を模したものか。

以上の詩群の語句には、長屋王以前の（懷風藻前期の）それと比較して、六朝詩語のほかに数多の初唐詩語が加はったことは注意すべきことであり、詩の一步展開を意味する。以下なほこれについて論ずる。

四 長屋王をめぐる詞苑の詩群について語句を中心とする一応の考察を加へた。そのうち特に詩序二篇はわが上代人の作としては、佳品と思はれる。その骨子は初唐詩の序によって組み立てられ、詩句もおほよそそれを模しながら表現の向上をめざしている。初唐の詩序、王・楊・盧・駱の四傑の作は、何れも骨子は同じ傾向にあるが、最後の結び「人探一字」云々は王・駱の作、特に王勃の詩序の影響が著しい。初唐に於ける四傑時代の詩風は、ここに於て、長屋王歿の天平以前、神龜年間（或は溯って養老後期）を中心として移入開花したものであり、長屋王の詩宴に於てその満開をみる。わが上代詩は一般に長屋派の詩とそれ以前の詩とに分けるのが最も妥当と信ずる。以前の作はむしろ六朝詩文選語の利用が中心で

あった。中には未熟のためか、判事紀末成の「臨水觀魚」(25)の如きは陳張正見、釣竿篇の剽竊に近い(昭和廿五年田村謙治氏の指摘が最も早い)。やはり作詩の蕾の時代のためであらうか。長屋王派の詩はその数から云ってもそれ以後の詩の主流を占める。それは王勃詩などの模倣から出発してはゐるが、王勃詩集を隅から隅まで研究し尽してゐると思はれ(尤も悪く云へば、それを机上に置いて絶えずバラバラめくつてゐる)、いちいちの詳しい故事出典を知らないにしても、その詩をよく愛読していたことは、その語句の使用態度によってわかる。これを前代の作と比較すれば、末茂は原詩のむつかしい語句はすべてこれを飛ばし、避けてゐるが、長屋王時代の詩は初唐の原詩を巧みに利用する。王勃、駱賓王の詩句(詩語)は文選語に比して、おほよそ具体的に描写的で美しい。かうした語句をそれらの詩のあちこちから引出し綴り合はせてゐるのが長屋王をめぐる詩の特色である。これは彼の歿後に於ても同じ傾向をもつ。藤原宇合にしても藤原万里にしても、家系から云へば、長屋王の政敵であった。しかし宇合の「暮春曲宴南池」の序と詩、万里の「暮春於弟園池置酒」の序と詩(後者については前回の拙稿参照)の何れも長屋王宅の詩序とその構成は同じく、そこに王勃詩(駱賓王詩)の詩風の流れをみる。

長屋王詞苑の詩については、序ほどに初唐詩の影はみられない。これは句が少ないし、また詩は序に比してかなり自由に作られるのもここに原因がある。しかし、

- (62)「一面金蘭席、三秋風月時」
- (68)「高旻開遠照……無疲風月庭」
- (71)「山牖臨幽谷……離席開文遊」
- (75)「帝里浮春色……鶴蓋入仙家」
- (77)「勝地山園宅……白雲一相思」
- (79)「南登錢送秋……驂帶斷雲浮」
- (86)「岐路分袞易、琴樽促膝難」
- (90)「帝里烟雲乘季月、王家山水送秋光」

などの句は、やはり王勃・駱賓王の詩に類句類語をもつ。これらの句は両者の詩の精神を汲み、追体験したのではなく、まだその語句を嘗める途中にある。しかし少くとも長屋王大臣在職時代(養老後半より天平初年まで約十年)に於ては、

初唐詩をめぐると一つの「詩文学時代」(初唐詩模倣文学時代)を形成してゐたと云へよう。しかも彼の歿後も後に続く詩はほぼ同じ傾向にあって(文選も利用されてゐることは勿論である)、ひろく云へばこの詩文学時代は奈良朝末まで延長してもよからう。平安朝に入つて当分の間は、白詩を知らざる人々によつて詩賦が作られ、その中の白眉は経国集である。これには詩序がなく、賦と詩(詞曲をも含む)である。しかもこれらの作品は六朝詩、唐詩(中唐まで)を万遍なく利用し(尤もこれらは「類書」の詩賦を利用したものが多し——後日に譲る)以前の「初唐詩模倣時代」の如き著しい特色はない。各人各様に詠じ、同じ方向の特色をもたないことは、次第に作詩の巧みになつた証拠とも見られるが、この「初唐模倣詩文学時代」はその点に於て作詩の未熟期を意味するであらう。日本書紀の述作に際して、「類書」特に芸文類聚を大いに利用したと云う私見はかつて發表した(本誌参照)。もし長屋王らが日本書紀編纂者と同様にこれに目をつけたならば、その詩は六朝的であつたことは当然の事實であり、また平安初頭詩ともかなり類似の点が多かつたかと思はれる(末茂の例の詩は類書に直接よつたものであらう)。しかしこの便利な「類書」の詩賦を捨てて、ひたすら初唐の王勃詩などによつたことは、幸か不幸かわが詩に於ける一つの文学期を形式するに至つた。初唐詩のうち王勃と駱賓王が最も多く用ゐられたことは、それらの伝来によるのが最も大きな原因ではあらうが、これらの詩の豊富さにもよるであらう。四傑のうち、両者に最も詩序が多く、王勃のもの四四首以上に対して(完本は残らない)、ほぼ楊炯十一、盧昇隣七首に過ぎない。しかも王勃のはその九割までが宴序(送別をも含む)であり、かうした点に於てもこれが種本となつたのも大きな理由がある。

五 長屋王はその地位によつて祝福され、ことある毎に詩の宴を開いた。五八即ち四十歳を祝ふ宴もその一例。四十歳と云へば、もし四六歳歿説(公卿補任、懷風藻寛文版イ本の説)をとれば(川崎庸之氏も同様)、右大臣最後の年(723)、即ち左大臣となるべき前年の初春に当る。この際の詩も二首残る。

(64) 賀三五年一 (刀利宣令)

縦賞青春日

ほしきままに賞あはれぶ青春の日を、

相期白髮年

ともに期ねがふ白髮の年を

清生百万聖

清かはは生うむ百万の聖、

岳出半千賢

岳やまは出です五百の賢

下_レ宴 當時宅

宴を下す鄭當時の宅、

披_レ雲 樂 広 天

雲は披く樂広の天_{そら}

茲 時 尽 清 素

この時_{ことごと} 尽く清素なれば、

何 用 子 雲 玄

何を用ゐむ太玄經

（「清生」以下二句の解は大野注が正しい。「岳出」（大野注）は諸本「岳土」に作る。「岳」を二字にわけて訂正した「丘出」の本文も可能である。「半千賢」は孟子（公孫丑）に典故をもち、王勃「終不能_レ五百年而生_三兩賢_二」（秋夜於綿州群官席別薛昇華序）の例もある。「當時」は人名、前漢の鄭當時のことで（大野注）、多くの士を門に招いた人、長屋王をこれに擬したもの。「當時」は直接に漢書（鄭當時傳）によらないで、王勃「有_三當時之駢騎_二」（秋晚入洛、於畢公宅別_三道王_一宴序）、駱賓王「當時門客今何在」（疇昔篇）などに暗示を得たものであらう。諸本「広樂天」は「樂広天」の誤。樂広披雲の故事は、文王が姜公に遇った記事の、中論（大野注）よりも、世説賞譽論の故事によるとみるべきもの。二

(107) 賀_三五八年_二宴（伊支古麻呂）

万 秋 長 貴 戚

萬秋に貴戚に長じ、

五 八 表 遐 年

五八は_{よそぢ}遐年を表す

真 率 無 前 後

（君は）真率前後の差なく（客を招び）、

鳴 求 一 愚 賢

鳴求_{ともをよびて} 愚賢のへだてなし

令 節 調 黄 地

令節は大地を調へ、

寒 風 變 碧 天

寒き風は碧天_{あをきそら}に変ず

已 応 螽 斯 微

已に螽斯微に_{すでさかゆるし} 応じたれば、

何 須 顧 太 玄

何ぞ_{もちろ} 須む太玄經

（この詩は、前の詩と同じ賀宴の詩、時は新春。何れも「何用子雲玄」、「何須顧太玄」など、大差のない内容をもつ。「鳴求」は諸注はつきりしないが、楚辞「鹿鳴求_三其友_二」、文選「哀鳴求_三匹儔_二」（曹子建、贈王粲）などの如く、

動物が相手を求めるように、友を求めて賢愚のへだてなくこの宴に加へるの意であらう。「真率」の故事は沢田注に南史陶潛伝や宋史范純仁伝をあげてゐるが、大野注の晋羊曼の故事(世説、雅量篇)がよからう。二
長屋王の詞苑に加はった人々は、当代一流の人達が多かった。養老五年正月右大臣就任の後(廿三日)、東宮(聖武天皇)に侍した人々の中に、

山田三方・山上憶良・塩家吉麻呂・刀利宣令

の名が見え、その数日を越えた廿七日には、「文人武士、国家所重」云々の詔と共に賞賜を加へられた人々に、

背奈行文・調古麻呂(以上明経博士)・箭集蟲麻呂・塩屋吉麻呂(以上明法)・山田御方・下毛野蟲麻呂(以上文章)

の名が見える。かうした人々は権勢をねらふ武人官吏に比して、文雅の道を求める者であり、主人公長屋王の文雅的地位を仰いで佐保邸に集会したのである。

ここに僧延慶作の藤原武智麻呂伝(家傳下)がある。これは川崎庸之氏の説の如く(「記紀万葉の世界」)、藤家氏側より眺めたものであつて、長屋王の事蹟を抑へ、武智麻呂像を強く美しく美化しようとした風がみえる。彼は長屋王に比して、絶えず一段階下の位を昇進し続ける。任意に続日本紀の記事をあげてみても、

長屋王 武智麻呂

(養老五年) 從二位、
(一月五日) 右大臣、
中納言

(同二月) 給帶刀資
(廿五日) 人十八、
給四人

と云つた風であるが、同年十二月八日二人をして「行御装束事」の記事もある如く、常に行動を共にしながらも、長屋王の後塵を仰いでばかりゐた。そこに藤原家としての権威もあり、不満もあつたと思はれる。しかし好機到来、彼はやがて天平元年二月十一日長屋王の罪の窮問に加はり、三月四日の昇進に際して大納言となる。かうした対長屋王の關係から、長屋の事蹟に眼をつむり、武智麻呂像を拡大し、その讃に筆を尽したのがその伝である。

当此時、舍人親王知太政官事、其間參議高卿有中納言丹比原守、三弟式部卿宇合、四弟兵部卿麻呂……宿儒有背奈行文、箭集蟲麻呂、塩屋吉麻呂……等、文雅有山田史御方……等僧綱有少僧都神敎律師道慈並順天休命、共補時政、由是國家殷賑、倉庫盈溢、

天下太平……至_三季秋、每与_二文人才子_一、集_二習宜_一之別業、申_二文會_一也、時之學者、競欲_レ預_二座_一、名曰_二龍門点額_一也

この。印は何れも長屋王詞苑に加はった人々であり——但し道慈には「初春在_二竹溪山寺_一、於_二長王宅_一宴、追致_レ辞并序」⁽¹⁰⁴⁾があり、不参加となつてゐる——、この記事を多少変更しただけで、長屋王の宴を想像させるに十分である。武智麻呂は弟宇合の如く文才はなく、習宜^{すげ}別邸の文苑に於て彼の文藻はどれほど發揮されたかは疑はしい。むしろ地位を利用した点の方が濃厚である。「龍門の点額」こそはむしろ長屋王の詩文の座に与へた方がより適切であつた。天平元年二月十五日の詔「左大臣正二位長屋王、忍戾_二昏凶_一、触_二途則著_一、尽_二慝窮_一奸、頓陷_二疎網_一、刈_二夷奸党_一、除_二滅賊惡_一、宜_二國司莫_一令_二有_一衆」は、長屋王一派の堅固さを反面で頌はせ、その關係者は多数罰せられた。天平十年四月十日、長屋王の恩遇を蒙つてゐた大伴子虫が碁を囲んでゐた際、こと長屋王の事に及び、かつて彼を誣告した中臣宮処連東人を切り殺した事實は、やはり逝きし長屋王の人柄を思はせる一端となるであらう。懷風藻の撰者は現在不明であり、恐らく将来も定説はでない。詩の採集態度はかなり偏してゐる。しかし家伝によれば、当然存在して然るべき武智麻呂の「習宜^{すげ}詞苑」の詩はなく、長屋王の「作室^{さへ}詞苑」が中心となつてゐることは、やはり長屋王の文学を愛好したためであつた。その苑に列する人々、たとへば文人をもつて朝廷より賞を与へられた山田三方・下毛野蟲麻呂の作が初唐詩的であることは、当時の流れの傾向を示し、同時に長屋王派グループもそれであることを意味する。この意味に於て、長王詞苑の詩群をわが漢文学史上に大きくとりあげることができる。

懷風藻を中心とする上代詩は、その文学史の上から眺めて、

前期 第一期 …………… 近江朝詩まで（実物殆んど残らず）

第二期 …………… 以後

後期 第三期 …………… 長屋王時代（養老中期より天平初年ごろ）

第四期 …………… 以後

に分けるのが正しいと信ずる（或は前期と後期の二つに）。第一期二期は詩語の利用の面について大差はなく（前期）、第三期長屋王時代に入つて、六朝詩語の上に更に初唐詩語が加はり、特に詩序なども述作され、新しい展開を示す（第四期も同

じ傾向にある)。これは万葉集時代の第二期の中期より第三期にかけての時代にあたり、時代区分の上でかなりの一致をみる。万葉集第三期四期に於て始めて詩序数篇が現はれるのも、この上代詩(後期)と符合し、長屋王時代の詩序の表現を追ふ。かうした点に於て、懷風藻時代と万葉集時代に文学上の交流をみる。これらについての詳論ならびに上代詩前期については、すでに別紙を予定してゐる。今は長屋王時代の詩を中心としてこれに多少の考察を加へることに止める。